



スイスのパーゼル美術館で開催された個展「7,070,430Kのデジタルスピット」(2015)展示風景から。巨大なジャボン玉内部に密閉された草花は、花弁や茎など部分ごとに天ぶらの衣をつけて油で揚げられ、全体が樹脂で固められている。匂いは失われ、脆弱、腐敗、暴力的な力の均衡の中に異様な触感が浮かび上がる。

Courtesy of the artist, 47 Canal, New York, and Kunsthalle Basel. Photo: Philipp Hänger

ANICKA YI

新鋭作家が切り拓く アート最前線

革新的なアーティストに贈られる「ヒューゴ・ボス賞」に輝いた、ニューヨーク在住のアニカ・イー。匂いやテクスチャーなど五感に訴える作品が話題を呼ぶ、今もっとも勢いのある作家のひとりだ。MITでも創作を展開、バイオテクノロジーも駆使する彼女が目指すこれからのアートとは？

Photo KOHEI KAWASHIMA (Anicka)
Hair & Makeup AYA KUDO@seitomoko
Realization MANAMI FUJIMORI

PROFILE

1971年、韓国ソウル生まれ。2歳で家族とともにアメリカに移住。1997年、西海岸からニューヨークに移転し、コピーライターやファッション関連の仕事を経て、2000年代後半から制作活動に専念。リヨンビエンナーレなど国際展の出演多数。2017年ホイットニービエンナーレ選抜。



ニューヨーク拠点のアーティスト、アニカ・イーの近年の活躍は目覚ましい。内外のビエンナーレ展への参加やメジャーな美術館での個展開催が続き、昨年には、「ヒューゴ・ボス賞」を受賞。グッゲンハイム美術館主催のこの賞は、革新的で影響力ある現代作家に与えられる賞として有名だが、何よりの注目は、彼女のアートが奇妙で不思議、実にユニークなことだろう。

草花を天ぶらのように揚げた作品「賞味期限切れのミルクを使った作品」果ては、微生物や細菌を培養した作品など、素材も手法も通常のアートの概念を超えている。そして、どの会場にも漂う微妙な匂い。自然の芳香もあれば、ツンと鼻をつく腐敗や発酵特有の臭いもある。

「アートは普通、見ることに視覚が強調されるものですが、嗅覚や味覚、触覚なども別の感覚をアート体験に持ち込めたいと思いました。匂いの場合、記憶や思い出を呼び起こしたり、社会的、政治的な意味合いをもたせたりします。香りそのものが作品であるより、背景をなす物語が重要なのです」

なるほど、別離や喪失のテーマと結びついたイーの初期の作品は、ポエティックな香りに満ちていた。近年の彼女の関心はしかし、衛生上の問題や伝染の恐怖を伴う臭気であり、ときにそれは女性蔑視の対象ともなる。そんな構想のもとに始まった一連の展示では、女性100人の口腔や腋の下、陰から集めたと

いうDNAサンプルの集合体が登場。新しい、女の香り、を生成すべく、会期中、巨大な寒天の上で培養され、フェミニスト的な野心作として大いに注目を集めた。

科学者との共同作業でアートの領域を押し広げる

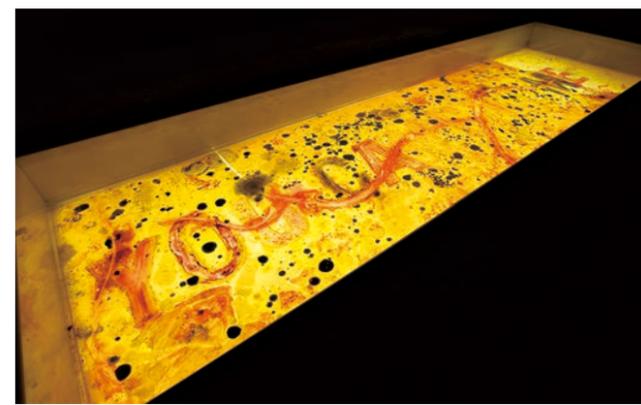
奇想天外ながら、昨今のバイオテクノロジーの発展にも通じたイーのアート。制作の背景には、ボストンのマサチューセッツ工科大学(MIT)が主宰する「芸術・科学・テクノロジー研究所」の招聘作家として過ごした、貴重な1年があるようだ。「科学者との共同作業は素晴らしい経験でした。人間の答えはすべて生物学にあると思います」と、最新作では、植物と動物と合成素材が一緒になったようなハイブリッド彫刻を手がけ、よりいっそうの展開を見せている。

科学にしろ、アートにしろ、イーは専門的に学んだわけではない。自分がやりたいことが何なのか、それを知るために多くの経験を積み上げてきたと言う。「アーティストとして本当にやりたいことができるようになるには、長い時間がかかるものだと思います」。そんなイーが、いま所属する画廊と出会ったのは、2009年のこと。チャイナタウンの雑居ビル、住所をそのまま画廊名にした若いギャラリーには、アントワン・カタラー、ジョッシュ・クライン、アリス・バレンボイムら、後にポスト・インターネット世代と



《クルージン・フォー・ブルーージン》(2009) 2009年のグループ展「無名たち」に出品された初期の作品。ゼラチンなど食材や、天ぶらの衣をつけて揚げた草花など、奇妙な素材で一躍注目された。作品タイトルは「あえて危険の中へ」の意。

Courtesy of the artist and 179 Canal, New York. Photo: Margaret Lee



Courtesy of the artist, 47 Canal, New York, and the Kitchen, New York. Photo: Jason Mandella



《明日が来れば》(2016) ドイツのカッセル市フリデリシアム美術館で開催された個展「ジャングル・ストライプ」(2016)の中の造花シリーズの1点。鳥の皮膚を連想させるシリコンのフレームにアマゾンの熱帯植物をモデルにした樹脂の花が妖艶。

Courtesy of 47 Canal, New York and Fridericianum, Kassel. Photo: Fabian Frinzel

66 アーティストとして 本当にやりたいことができるようになるには 長い時間がかかる

して注目されることになる面々が集まっていた。「彼らにとっても、私にとっても重要な転換期でした。權威の声を待つのではなく、自分たちで機会を作ろう。自分たちで状況を作り出そうという気持ちでした」

イーにとって目下一番の関心事は、4月から始まる「ヒューゴ・ボス賞」受賞記念の展覧会だろう。「今までやってきたことを続けるだけ。でも、野心的な展示になると思いますよ」と、にっこり。柔らかな口調のなかにも自信と覚悟に溢れた、力強い言葉だった。

Hugo Boss Prize

グッゲンハイムで個展を開催!



ヒューゴ・ボス賞記念のオブジェを手にするアニカ・イーを囲んでヒューゴ・ボスCEOのマーク・ランガー(左)とグッゲンハイム美術館館長リチャード・アムストロング。受賞記念の展覧会は、タワー館5階を会場に4月21日~7月5日開催。www.guggenheim.org